

保育者養成校における SEL 教育の授業

榎澤令子 (横浜創英大学)

Abstract: This study aims to introduce Social and Emotional Learning (SEL) education to a training school for early childhood educators and caregivers, and to assess its feasibility based on student feedback after completing the course. We obtained the following prospective results: Firstly, the students were surprised and excited by the prospect of learning about emotions and skills, and recognized the need for SEL learning. Secondly, students recognized that, in addition to the benefits of visual aids, children could learn through movement and physical activity. Thirdly, they believed that due to the system's high functionality and convenience, the SEL education could be adopted immediately in classes by teachers and caregivers with little experience.

Keywords: SEL education, early childcare education, caregiver, training school

問題と目的

幼児期に非認知能力を伸ばすことは、その後の認知能力や学力に影響するといった Heckman (2013) の長期的経済的研究や OECD の提言もあり、幼児期の教育・保育における社会情動的スキル獲得の重要性が言われるようになってきた。

また、2017 年には、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の 3 法令が同時に改訂され、どの幼児教育施設に通っても、同じ質やレベルの幼児教育・保育を受けられるように保障することが望まれるようになっている(無藤・汐見, 2017)。また、この改定に伴い、共通の指針として、「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿(以下、「10 の姿」とする)」が明記され、小学校生活へ安心してつながる「姿」を育むことが求められている(無藤, 2018)。この「10 の姿」には、「自立心」「協同性」「道

徳性・規範意識の芽生え」など、自己や他者の情動・感情の育ちが含まれている。

これまでの幼児教育・保育の中で、保育者たちは子どもたちの遊びや、他者とのかかわり、そのプロセスを見守り、受け止め、子どもたちの力を引き出し、幼児期の育ちと学びを支えてきた。そこに、さまざまな幼児教育プログラムなどが増え、アンガーマネジメントや、ソーシャルスキルトレーニング等、今までとは異なる、積極的なアプローチ方法といえる情動教育＝Social emotional learning(以下、SEL 教育)が加わり始めている。

幼児教育における SEL 教育を概観すると、まず、山田・小泉(2020)の SEL—8N (Social emotional learning of 8 abilities at Nursery school)があげられる。この 8 能力は、SEL 8 の「自己への気づき」「他者への気づき」「自己のコントロール」「対人関係」「責任ある意思決定」(5 つを基礎的社会的能力と呼ぶ)、「生活上の問題防止のスキル」「人生の重要事態に対処

する能力」「積極的、貢献的な奉仕活動」(3つを応用的社会的能力と呼ぶ)と示されている(小泉, 2011)。この幼児版プログラムである SEL—8N は、幼児にとってわかりやすい紙芝居を用いて、保育者が子どもたちを導くものである。山田・小泉(2020)は、幼稚園児に対して SEL-8N を 8 か月間実施し、統制群と比較して、行為・情緒・仲間関係の問題、向社会性等に有意な効果がみられたという実践報告を行っている。

また、セカンドステップも比較的多く取り入れられている方法といえる。NPO 法人日本こどものための委員会(2025)によれば、幼稚園や保育所、小・中学校、児童福祉施設などに導入され、約 3 万人の子どもたちが受講しているという。井部(2019)は、現場からの声を取りあげ、多くの効果が得られていることを報告している。さらに、セカンドステップを保育所で実施した金山(2014)は、1 年間に渡る介入の結果、ソーシャルスキルと問題行動に肯定的な変化を見出している。

ほかにも、SEL 教育を取り入れているという幼稚園・保育園のホームページも散見される(2025 年 2 月現在)。

幼児教育・保育における SEL 教育が盛んに行われるようになってきた昨今の動向を鑑み、保育者養成校において、保育者になる学生たちに、SEL 教育を伝えることが使命と考える。そこで本研究では、幼児教育・保育の保育者養成校の授業において、SEL 教育を取り上げ、学生たちに体験してもらった感想をもとに、今後の展望を述べていく。

方法

授業内容

4 年制大学の専門選択科目の「道德性の発達」という科目の授業において(2024 年度前

期)、SEL 教育の紹介と体験の授業を行った。

「道德性の発達」の授業は、第 1 回から 10 回では、道德性の理論(ピアジェやコールバーグの理論)、「10 の姿」の「道德性・規範意識の芽生え」などを学び、アクティブラーニングとして、小学校の小学校学習指導要領(2017 年告示)解説と実際の教科書とを比較して読むなどを行った。特に、小学校における道德性教育でとりあげられる、「自分自身をみつめる」「人とつながる」「社会とつながる」「生命、自然、大いなるもの」の 4 つテーマと、「10 の姿」との関連を考え討論を行った。第 6 回の授業から、文部科学省の「幼稚園における道德性の芽生えを培うための事例集」を用いて、子どもたちが幼稚園生活の中で自己や他者と交流しながら、さまざまな気づきを得ていき、傍らで見守る保育者がかける言葉や行動を学んでいくことをねらいとした事例研究も取り入れた。

第 11 回～15 回では、幼児教育における SEL 教育を取り上げ、現在行われている SEL プログラムを紹介することを試みた。第 11 回では、非認知能力、SEL 教育の説明、情動教育の必要性を伝えるとともに、心理教育プログラムと関連している絵本(『きもちってなあに?』など)を数冊取り上げて紹介した。第 12 回では、海外の情動教育の紹介として、セカンドステップ※を研究者が学生たちに行って見せ、教材などにふれてもらった。第 13、14 回では、子どもたちの心を育む SEL—8N(小泉・山田, 2018)の紙芝居を用いて、学生が保育者としてロールプレイを行った。第 15 回では、SEL 教育のまとめと今後の発展性にふれて、「道德性の発達」の総括を行った。授業の振り返りで、SEL 教育とセカンドステップに関する感想や考えをリアクションペーパーで述べてもらった。(※講義で紹介することに先立ち、研究者は、2022 年 9 月 10 日開

催、NPO 法人日本こどものための委員会主催の第 273 回セカンドステップ研修会・基礎研修を受講している。)

セカンドステップで使用したもの

第 2 週「よく聞くルール」、第 7・8 週「気持ちが変わる I・II」のレッスンカード。第 10 週「同じ気持ちと違う気持ち」の 1 日目の人形劇（好きと嫌い）、2 日目のレッスンカード（シオンさんとマリサさんの違い）。第 19 週「フェアな遊び方」のレッスンカード。

SEL—8N で使用したもの

学生の人数に合わせて、B. 他者への気づき・聞く「この顔どんな気持ち?」「この場面、どんな気持ち?」「話を聞く」「友達の好きなところ」の 4 場面、C. 伝える「いい気持ちとイヤな気持ち」「楽しい! 悲しい! 怒っているよ!」「『はい』と『いいえ』」「先生あのね」の 4 場面、D. 関係づくり（遊び）「いれて」「一緒に遊ぼうよ!」「みんな同じ気持ち?」「仲よくしよう」の 4 場面、E. 自己への気づき・ストレスマネジメント「うれしい、悲しい」「不安な気持ち」「深呼吸」の 3 場面を取り上げた。各自 1 場面を担当し、全員の前で紙芝居を行ってもらった。

対象者

履修者は 15 人（3 年生 13 人、4 年生 2 人）で、毎回可動式の机を「コの字」型にして周囲の学生たちの顔が見えやすい形をとった。授業の受講時、3 年生は、保育所実習を 1 回、4 年生は、保育所・幼稚園の実習を計 3 回経験しており、徐々に実践的な授業が増えていく時期であった。

倫理的配慮

本研究における授業時に回収したリアクシ

ョンペーパーについて、学生個人が特定されないこと、学会等への発表に使用することの了承を得た。

結果

学生の考え・感想であげられたものを、以下にあげる。複数あげられていたものは、一文にまとめて記した。また、意味が変わらない程度に、表現や句読点など加筆修正した。

セカンドステップ

- ・手や身体を使いながら行っていくこと、「他者の心を、手で双眼鏡を作ってみよう」など、子どもたちにとってわかりやすい。
- ・「同じ考え方をする人は、ひじをたたいてね」、「手を二回たたいてね」といったように、きちんと聞いているかを保育者が確認していることは、自分にも取り入れられるかもしれない。
- ・おなかに手をあてて「とまれ」というのは、子供にとって「おまじない」のような感じかもしれないが、自分を暗示にかけるようで、面白い。
- ・話を聞くときは、「目と耳と口と身体を使う」というように、目で見ると、耳で聞く、口は静かに、身体は落ち着く（体を両腕で抱く）と自分に言い聞かせるようなやり方が、子どもにとってもわかりやすいと感じた。
- ・エピソードの中で他者の気持ちに気づいていくということも大切だが、紙芝居やセカンドステップを使って、実際に落ち着いている時（冷静な時）に、「他者の気持ちに気づく」勉強をするというのは、子どもにとって、しっかり習得できるように感じた。プラスになると感じた。
- ・幼稚園や保育所で、自分や人の心理を扱う教育は必要だと思った。

・子どもたちに、自分の気持ちや、他者の気持ちに気づいてもらうために、プログラムを実施することは、保育の中でも大切だと感じた。

・他者はどんな気持ちでいるかを、客観的にとらえることができると感じた。

・人形劇のほうストーリーがわかってよいが、プログラムがきちんと頭に入っていないとできないため、行うのは大変だと感じた。

SEL-8N

・スキルを学習するというのが新しい感じだった。

・わかりやすいキャラクターで、抵抗感なく学べる。

・表情をクイズ的にあてる・考えさせることは、子どもたちが楽しみながら考えられてよいと思う。

・幼稚園・保育所でありそうな場面が多かったが、紙芝居を使って指導することで、実際の場面と結びつけることができ、より多くの子供たちが理解を深めることができる。

・いろんな人がいろんな感情を持っていて、それぞれが大切にされるというメッセージを感じた。一つの答えではないことで一人一人が大切にされているように思った。

・発達心理学で日本の子どもは、自己主張より自己抑制が強いことを習ったが、幼児期から自分の気持ちを発言できることは、グローバルに生きていくには大切だと感じた。

・深呼吸をして、自分の怒りをしずめる方法を子どもたちが知るの、よい取り組みだと思う。怒りをコントロールすることの大切さを感じた。

ほかにも、SEL—8N を体験したことに対して、感情をこめてうまくできた・できないなどの感想が得られた。

教材研究として、多くの学生が、心理教育

プログラムを取り入れることの重要性を感じるとともに、プログラムの実施のしやすさを感じているようだった。

考察

学生たちは、大学における SEL 教育の学びから、主に 3 点を感じ得たのではないかと推察する。

1 点目は、幼児期の子どもたちがスキルを学ぶこと・感情の学習をすることに、驚きや新鮮味を感じながら、その必要性を感じているといえる。幼児教育・保育現場では、子ども達が自己や他者の感情にふれる機会が度々あり、いざこざが起きている時は、子どもたちは泣いたり、怒ったり、感情が高ぶって不安定になる。こうしたいざこざ場面において、保育者は、子どもたちが発した言葉や行動を冷静に受け止めて、丁寧に言葉かけを行ったり、見守ったりしていくであろう。しかし、実習生として入った学生たちが、いざこざを介入する際に、焦ってしまい、見守る余裕はなかなかないという。また、感情が高ぶっている時にかけた言葉は、子どもたちに受け入れられないかもしれない。一方、SEL 教育は、あえて落ち着いている時に、「怒りの感情がわいた時にはこうやって落ち着けばいい」というスキルを学習するため、子どもたちが「どうすればよいか」のスキルを持つことになる。反復的な学習は必要になるが、子どもたちがスキルを持っていれば、「まずは落ち着いてみようか」といった声かけから、冷静になる援助ができるであろう。

また、学生たちに、冷静な時こそ客観的に感情を学ぶ機会であることに気づいてほしい。特に、負の感情を扱う時には、「落ち着いて考えられる」環境設定が必要であり、自分の保育に取り入れてほしい考え方である。

また、「落ち着く」とおなかに手をあててラベリングすることや、呼吸法などのストレスマネジメントの方法など、認知行動療法的なアプローチも含まれている。子ども達が不安な時、悲しい時、スキルを持っていることで、レジリエンスも高まるといった、臨床心理学的視座に学生たちは触れることができただろう。

2 点目に、視覚教材のよさと共に、子どもたちが身体や動作を用いて体得することを感じたと考える。幼児教育・保育現場では、「手遊び」「○○組さ〜ん」といった声掛けで注目させることは、よく使われている手法である。しかし、特にセカンドステップでは、「聞いている人は 2 回手をたたいてね」等、やりとりの中に、動作・ジェスチャーなどがふんだんに取り入れられていたことを感じたであろう。「きちんと聞いているよ」のサインを送り、それを保育者が確認して確実なコミュニケーションをとる意図が感じられたのではない。幼児期は言語発達の途上であり、個人差も大きい中、ことばを動作や身体で表すことは、一つの表出手段を増やすことになるとも考えられる。また、紙芝居・写真・ポスター・人形劇等の視覚教材は、子どもたちにとってわかりやすく、注目しやすいものだろう。子どもたちをひきつけながら、ことばや動作など体全体を使ったコミュニケーションも、保育の中に取り入れられる視点であろう。

3 点目に、経験年数が少なくても、すぐに取り入れられる機能性や利便性の高さを感じたと考える。メタ分析(瀧澤・松本, 2022)によれば、教員が何度か SEL プログラムを経験し熟達度が高まってきてから、展開していくことが有効であるとされている。しかし、SEL—8 N やセカンドステップのなどは、手順や教授方法が示されており、経験年数の

浅い保育者にとって、SEL 教育を体感・体得しやすくなっている。SEL 教育の教材に触れることで、目標・めあての設定の仕方、子どもたちがどのように感情・情動を学ぶかのプロセス、SEL 教育の内容や流れの理解を深めることができる。

以上のように、SEL 教育は学生にとって新しい視点を多く感じたと思われるが、授業がきっかけとなり、SEL 教育により関心を持ち、自分の幼児教育・保育に良い点を取り入れてほしいと考える。

利益相反

本論文について、利益相反に関連する開示すべき事項はない。

引用文献

- Heckman, J. J. (2013). *Giving kids a fair chance*. MIT Press. (古草秀子 (訳) (2015). 幼児教育の経済学 東洋経済新報社)
- 井部文哉 (2019). キレない子どもを育てるセカンドステップ NPO 法人日本こどものための委員会
- 小泉令三・山田洋平 (2018). こどものきもちを育む 紙芝居作成ブック 世界文化社
- 小泉令三 (2022). 小中学生の SEL—8 S. p168-176.
- 文部科学省 (2001). 「幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集」17 版発行 ひかりのくに
- 金山元春 (2014). 保育所における「セカンドステップ」の評価 心理臨床学研究, 32, 132-136.
- 無藤隆・汐見稔幸 (2017). 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領はやわかり BOOK 学陽

書房
無藤隆 (2018). 幼児期の終わりまでに育って
ほしい 10 の姿 東洋館出版
NPO 法人日本こどものための委員会.
<http://cfc-j.org/>. (2025 年 2 月 22 日閲覧)
瀧澤悠・松本有貴 (2022). SEL プログラムを
学校に導入する 渡辺弥生・小泉令三
(編) ソーシャル・エモーショナル・ラー
ニング (SEL) : 非認知能力を育てる教育
フレームワーク (pp62-80) 福村出版

渡辺弥生・小泉令三 (2022). ソーシャル・エ
モーショナル・ラーニング (SEL) : 非認
知能力を育てる教育フレームワーク 福
村出版
山田 洋平・小泉 令三 (2020), 幼児を対象と
した社会性と情動の学習 (SEL-8N) プロ
グラムの効果 教育心理学研究, 68(2),
216-229.